

[研究報告]

医療・福祉系大学生の情動知能と情動語の関連

小玉 有子¹⁾、沖林 洋平²⁾

要 旨

本研究の目的は、医療・福祉系大学生の使用する言語と情動知能の関係を検討することである。本研究では、2022年度に入学した医療・福祉系大学1年生の情動知能と表出される情動語について量的および質的な分析を行った。186名の医療福祉系大学の大学生を対象に、情動知能については質問紙を用いて測定した。表出される情動語は、喜怒哀楽の感情別に自分たちが日常的に使う言葉について自由記述による回答を求めた。調査の結果、情動知能の因子構成は先行研究と同じ〈情動の表現と命名〉、〈情動の理解と認識〉、〈情動の制御と調節〉であることが示された。回答者の情動知能のパターンについてクラスタ分析を行った結果、クラスタの解釈に対する妥当性が高いと判断した。情動知能のクラスタと表出される情動語について対応分析を行った結果、情動知能のすべての因子の得点が低いクラスタは他のクラスタよりも表出される情動語の数とバリエーションの両方が少ないことが明らかとなった。

キーワード 情動知能 情動語 医療・福祉系大学生

I. はじめに

医療や福祉に携わる者が、患者や利用者との信頼関係を構築するうえで、自己の情動を適切に理解表現したり、他者の情動を正しく理解したりすることは、重要なスキルである。また、情動機能のうち、他者の感情や気持ちをも自分のことのように感じることができる共感性は、患者の苦痛を理解し、苦痛軽減を支援する態度であると言える¹⁾。

情動知能 (Emotional intelligence; EI) の概念については、数多く概念的に定義されている。例えば、Saloveyらの先行研究²⁾を踏まえて、Lawらは、情動知能とは感情を扱う個人の能力であり、下位能力には自分や他人の感情を (feeling) や情動 (emotion) を監視 (モニター) する能力、これらの感じ方や情緒の区別をする能力、個人の思考や行為を導くために、感じ方や情緒に関する情報を利用できる能力があると定義づけている³⁾。豊田らは、この定義に基づいて、日本版情動知能尺度J-ESCQ (Japanese Version of Emotional Skills & Competence Questionnaire) を作成している。この尺度は、情動知能を情緒の認識と理解、情緒の表現と命名、情緒の制御と

調節という3つの因子によって構成されるものである⁴⁾。J-ESCQは大学生の他者意識や表出される感情語などのような社会的相互作用にかかわる領域だけでなく、自伝的記憶や潜在的記憶のような実験的研究でもテストバッテリーとして用いられている⁵⁻⁸⁾。ただし、以上の研究は、一般の大学生を対象としたもので、医療・福祉系の大学生を対象としたものではない。医療・福祉系の大学生にとって、情動知能はより重要な要素であることから¹⁾、本研究では、医療・福祉系の大学生を対象として、情動知能の調査を行うこととした。

近年の大学生の表出される感情語については、実際に生じられる感情のバリエーションに対して、表出される感情語のバリエーションが少なくなっていることが考えられる。「やばい」「うざい」等、本来の意味とは異なる言葉が日常的に使われていたり、簡略化された表現が増えたり、表現された言葉の裏側に隠された感情を読み取ることができなかつたり、感情表現能力の低下を懸念している。小玉らは医療・福祉系の大学生を対象として、J-ESCQと喜怒哀楽に対して表出する感情語の回答を求めた。その結果、学生は日常的に、同世代や友人間だけで通用する言葉や自分なりの表現等を使用していること

1) 弘前医療福祉大学保健学部 (〒036-8102 青森県弘前市小比内3丁目18-1)

2) 山口大学教育学部 (〒753-8513 山口県山口市吉田1677-1)

が多いという結果を得た。また、2011年から2012年にかけて語彙数が増加している結果について、類似した感情経験であっても、個々によって表現が異なることになり、感情・情動の共有が難しい可能性を指摘している⁶⁾。本研究では、この結果を踏まえて小玉らの調査から10年が経過した時点での、医療・福祉系の大学生が表出する感情語の数とバリエーションについて調査を行う。

本研究を前調査から約10年後の2022年に行われたことには、次のような目的がある。2011年にLINEアプリの利用が開始され、SNSの利用率の増加に伴い「ぴえん」や「ばおん」等の限られた世代や利用者の間でのみ通じる簡略化された言葉の使用も増加した。2022年時点において、大学生のSNSの利用率は100%となり、大学生の日常の使用語彙が、情動知能や情動語の利用に与える影響がさらに大きくなっているのではないかと考えた。10年間の変化を調査分析することは、医療・福祉系大学生の情動教育において意義深いものと考えられる。また、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、2022年の大学生は、コロナ禍における教育形態の制限の影響を大きく受けている⁹⁾。大学や高校における授業の一部や大部分は、オンライン授業やオンデマンド授業で実施された^{9,10)}。このように、大学で生活しなくなることは、他者との対面での相互作用が制限されることに繋がる。また、対面でのコミュニケーションが制限されることで、コミュニケーションの手段がICT機器利用を介したものに取替わることとなる。そのような大学生の授業形態や、コミュニケーション形態の変容が情動知能に与える影響についても、検討したいと考える。

本研究では、小玉らと同じ項目、同じ手続きで調査することにより、先行研究との比較を行うことを目的とした。データ分析に関しては、先行研究に比べて手法を改良した。テキストマイニングを利用することで、調査における自由記述の分析手法として一般的なものとなり、自由記述から定量的なデータを得ることを可能とした。

さらに、データをより詳細に分析する視点として、情動知能のパターンと情動語の数やバリエーションの関係を検討することとした。また、情動知能の4ブランチモデルに基づいて情動知能と情動語の関係を検討する^{11,12)}。これは、情動知能を認知能力としてとらえ、客観的な行動に基づくものとする考え方であり、知能検査と同様の手法で測定可能であるとしている。情動知能の能力モデルは、情動知能のパターンと表出される情動語には関連がみられると予想されことから、本研究では、情動知能のパターンと情動語の関連について検討することとした。

II. 方法

1. 調査対象者

2022年度に入学した医療・福祉系大学および短期大学1学年に在籍する学生186名を調査対象者とした。比較対象の2011・2012・2013年3年間の対象者の合計は645名であった。各年の調査対象者の属性を含むクロス集計を表1に示す。

2. 調査期間

本研究の調査は、2022年5月11日～20日の期間に実施された。

3. 調査項目

情動に関するスキルの自己評価評定尺度は、高校生用情動スキルとコンピテンス尺度における3因子の内、因子負荷量の高い5項目ずつ計15項目について、5件法による回答を求めた¹³⁾。項目の内訳は、〈情動の表現と命名〉5項目(1. 4. 7. 10. 13)、〈情動の理解と認識〉5項目(2. 5. 8. 11. 14)、〈情動の制御と調節〉5項目(3. 6. 9. 12. 15)である。項目内容と因子分析結果を表2に示す。

情動語に関する調査項目は、「あなたが知っている感

表1 各年における回答者の所属学科と性別の数

	2011		2012		2013		2022		Total	
介護福祉科	0	(0)	0	(0)	0	(0)	9	(7)	9	(7)
作業療法学専攻	38	(19)	39	(20)	43	(20)	54	(32)	174	(91)
口腔衛生学科	0	(0)	0	(0)	0	(0)	6	(6)	6	(6)
救急救命学科	0	(0)	0	(0)	0	(0)	41	(7)	41	(7)
看護学科	44	(32)	107	(84)	70	(52)	54	(38)	275	(206)
言語聴覚学専攻	26	(16)	20	(13)	27	(20)	22	(15)	95	(64)
介護福祉学科	73	(36)	93	(48)	64	(39)	0	(0)	230	(123)
無回答	1	(1)	0	(0)	0	(0)	0	(0)	1	(1)
Total	182	(104)	259	(165)	204	(131)	186	(105)	831	(505)

各セルの実数が全体、カッコ内が女性

表2 項目内容と因子名

no	質問項目	因子
1	自分の気持ちをすぐに言葉に表すことができる。	a
2	私は、相手が思っていることを隠そうとしても、それに気付くことができる。	b
3	毎日いい気分が続くように心がけている。	c
4	自分の気持ちを、上手に言葉で説明することができる。	a
5	私は、相手が嫌な気持ちを隠そうとしていても、それに気付くことができる。	b
6	誰かに誉められると、もっと熱心に頑張ろうとする。	c
7	自分が感じている気持ちを、うまく表すことができる。	a
8	私は誰かと一緒にいるとき、その人の気持ちの変化（嬉しい・悲しい・楽しい・怒る等）に気付くことができる。	b
9	気分の良い時には勉強（仕事）がはかどり、頭にもよく入る。	c
10	自分がどのように感じているかを、簡単に言葉で言い表すことができる。	a
11	私は、一緒にいる人が落ち込んでいるとき、それに気付くことができる。	b
12	嫌な気持ち（腹が立つ・辛い等）になったとき、気持ちを切り替えて頑張ろうとする。	c
13	自分の気持ちを、上手く言葉や態度で表すことができる。	a
14	私は、相手の顔の表情から、その人の気持ちがわかり、どんな気持ちなのか言葉にすることができる。	b
15	気分が良い時には、どんな問題でも解決できると思う。	c

因子名	
a	情動の表現と命名
b	情動の認識と理解
c	情動の制御と調節

情・気分・情動を表すことばを教えてください。喜・怒・哀・楽、その他の項目ごとに、思いつく限りの言葉を記入してください。どんな表現でも構いません。普段使っている言葉をそのまま書いても構いません。」という指示のもと、枠の中に自由記述を求めた。

属性に関する項目としては、1. 学科・専攻（看護、作業、言語、介護、救命）、2. 性別（男、女）、3. 年齢（10代、20代、30代、40代、50代）からの選択とした。

4. 調査手続き

講義終了後教室にて、研究者から研究の趣旨および倫理的配慮について、口頭および文書で説明し、協力を依頼した。学生の研究協力への承諾は、Google Formsに作成された質問項目に回答を入力することによって、承諾したと判断した。

5. 倫理的配慮

本研究は弘前医療福祉大学研究倫理委員会の承認を得て行った【承認番号：143】。対象者に対し、回答は無記名とし、本研究で知り得た情報については本研究以外に使用しないこと、研究参加は自由意思であること、結果の公表についても個人が特定されないようにし、データは10年の保管期間後、復旧できない方法で、完全消去することを口頭および文書で説明した。

Ⅲ. 結果

1. 2011、2012年、2013年の結果

因子を参加者内要因、調査年を参加者間要因とする2要因分散分析を行った結果、調査年の主効果は見られなかった ($F(2, 4) = 0.56, ns, \eta^2 = 0.00$)。そのため、2011年、2012年、2013年は3年分のデータをまとめて用いることとした。各因子の平均値と標準偏差を表3に示す。

2. 2022年調査の結果

J-ESCQの回答で得られた結果について、因子分析を行った。本研究では、プロマックス回転、最尤法を採用

表3 情動知能の各因子の平均値と標準偏差

因子		平均	標準偏差
情動の表現と命名	2011	3.26	0.76
	2012	3.25	0.77
	2013	3.21	0.74
情動の理解と認識	2011	3.69	0.58
	2012	3.67	0.62
	2013	3.65	0.69
情動の抑制と調節	2011	3.77	0.89
	2012	3.68	0.65
	2013	3.63	0.68

した。平行分析に基づいて因子数を決定した。その結果、先行研究^{4, 5)}と同様の3因子〈情動の表現と命名〉5項目(1. 4. 7. 10. 13)、〈情動の理解と認識〉5項目(2. 5. 8. 11. 14)、〈情動の制御と調節〉5項目(3. 6. 9. 12. 15)を抽出した。適合度指標は、RMSEA=0.07、TLI=0.95、BIC=-177.32、 $\chi^2=94.42$ 、df=52、 $p<0.001$ であった。表2に示す。累積寄与率は61.09であった。

各因子の男女別の平均値と標準偏差を表4に示す。因子を参加者内要因、性別を参加者間要因とする2要因分散分析を行った。その結果因子の主効果($F(2, 368)=36.77$ 、 $p<0.001$ 、 $\eta^2=0.17$)、因子と性別の交互作用($F(2, 368)=8.03$ 、 $p<0.001$ 、 $\eta^2=0.04$)が有意であった。交互作用が有意であったので、Holm法による下位検定の結果、〈情動の表現と命名〉において、男性が女性よりも有意に高かった($t(184)=-3.11$ 、 $p<0.05$)。

表4 各因子の男女別の平均値と標準偏差

	性別	平均	標準偏差
情緒の表現と命名	女性	3.34	0.93
	男性	3.74	0.79
情緒の認識と理解	女性	3.98	0.80
	男性	4.06	0.74
情緒の制御と調整	女性	3.96	0.71
	男性	3.90	0.66

3. 情動知能の2010年代と2022年の比較

2011年から2013年までをまとめて各因子の平均値、標準偏差と2022年の各因子の平均値と標準偏差を男女別に表5に示す。2011年から2013年までを前期、2022年を後期とする。2011年から2013年のサンプル数は645、2022年のサンプル数は186であった。各因子の平均値を参加者内要因、前期後期を参加者間要因、性別を

表5 情動知能の経年比較

因子	性別	平均	SD	
情動の表現と命名	2011~2013	男性	3.29	0.75
		女性	3.21	0.76
	2022	男性	3.74	0.79
		女性	3.34	0.93
情動の理解と認識	2011~2013	男性	3.66	0.65
		女性	3.68	0.62
	2022	男性	4.06	0.74
		女性	3.98	0.80
情動の抑制と調節	2011~2013	男性	3.70	0.89
		女性	3.68	0.62
	2022	男性	3.90	0.66
		女性	3.96	0.71

参加者間要因とする3要因分散分析を行った。その結果、情動知能の因子の主効果($F(2, 1654)=106.64$ 、 $p<0.001$ 、 $\eta^2=0.11$)、前期後期の主効果($F(1, 827)=40.05$ 、 $p<0.001$ 、 $\eta^2=0.05$)、3要因の交互作用($F(2, 1654)=4.22$ 、 $p<0.01$ 、 $\eta^2=0.01$)が有意であった。Holm法による下位検定の結果、男性では〈情動の表現と命名〉と〈情動の理解と認識〉で2022年の方が前期よりも高かった($t(827)=-4.52$ 、 $p<0.001$; $t(827)=-4.68$ 、 $p<0.001$)。女性では、〈情動の理解と認識〉と〈情動の制御と調節〉において2022年の方が前期よりも高かった($t(827)=-4.16$ 、 $p<0.001$; $t(827)=-3.50$ 、 $p<0.05$)。

情動スキルの3因子を従属変数とするクラスタ分析を行った。樹形図と得られた結果を参照した結果、4クラスタが妥当であると判断した。情動知能の下位因子における各クラスタの平均値と標準偏差を表6に示す。

表6 情動知能因子における各クラスタの平均値・標準偏差

因子	クラスタ	平均	標準偏差
情緒の表現と命名	1	2.60	0.60
	2	3.91	0.46
	3	4.48	0.36
	4	2.71	0.63
情緒の認識と理解	1	3.85	0.52
	2	4.14	0.61
	3	4.71	0.32
	4	2.33	0.60
情緒の制御と調整	1	3.65	0.48
	2	3.97	0.52
	3	4.80	0.17
	4	2.89	0.73

情動知能尺度の下位因子の平均値を参加者内要因、クラスタを参加者間要因とする2要因分散分析を行った。その結果、情動スキル因子の主効果($F(2, 364)=22.34$ 、 $p<0.001$ 、 $\eta^2=0.11$)と2要因の交互作用($F(6, 364)=20.90$ 、 $p<0.001$ 、 $\eta^2=0.26$)が有意であった。交互作用が有意であったため、Holm法による下位検定を行った。情動の命名と表現においては、クラスタ3がクラスタ2よりも有意に高く($t(182)=-5.47$ 、 $p<0.001$)、クラスタ2はクラスタ1よりも有意に高く($t(182)=-15.01$ 、 $p<0.001$)、クラスタ1と4に有意差はなかった($t(182)=-0.78$ ns)。〈情動の理解と認識〉においては、クラスタ3、2、1、4の順で有意に高かった($t(182)=6.88$ 、 $p<0.001$; $t(182)=5.60$ 、 $p<0.001$; $t(182)=6.48$ 、 $p<0.001$)。〈情動の制御と調整〉においても3、2、1、4の順で有意に高かった($t(182)=-10.83$ 、 $p<0.001$; $t(182)=-3.80$ 、 $p<0.001$; $t(182)=7.67$ 、 $p<0.001$)。クラスタと

性別のクロス集計表を表7に示す。χ²検定の結果、有意ではなかった (χ²(3)=5.34、ns)。

表7 情動スキルクラスと性別のクロス集計表

		情動スキルクラス				合計
		1	2	3	4	
女性	度数	39	42	18	6	105
	列%	68%	51%	55%	43%	56%
	全体%	21%	23%	10%	3%	56%
男性	度数	18	40	15	8	81
	列%	32%	49%	45%	57%	44%
	全体%	10%	22%	8%	4%	44%
全体	度数	57	82	33	14	186
	全体%	31%	44%	18%	8%	100%

4. 感情を表現する語彙

喜怒哀楽の感情を表現する語彙の自由記述データについて、テキストマイニングを行った。本研究では、テキストマイニングにはKH Coderを用いた。まず、得られた自由記述データの喜怒哀楽の感情ごとに使用頻度リストを作成した。

次に、得られた自由記述と情動スキルのクラスとの関係を検討するために、対応分析を行った。感情別の対応分析の結果を図1から図4に示す。

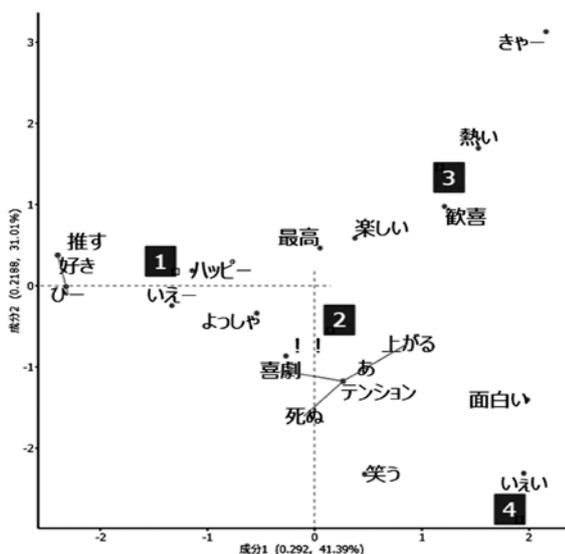


図1 感情語「喜」の対応分析

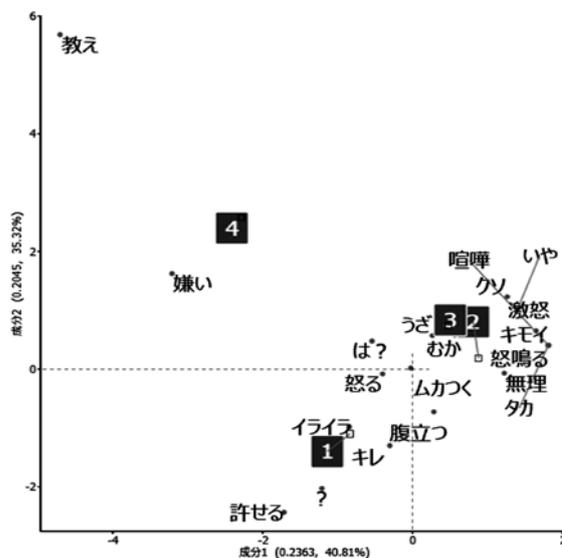


図2 感情語「怒」の対応分析

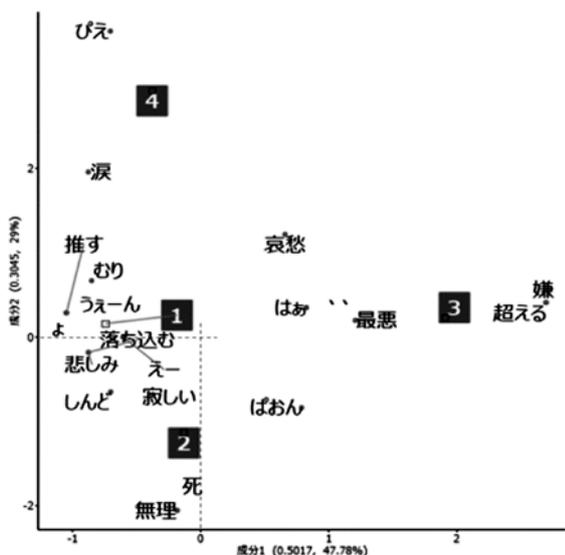


図3 感情語「哀」の対応分析

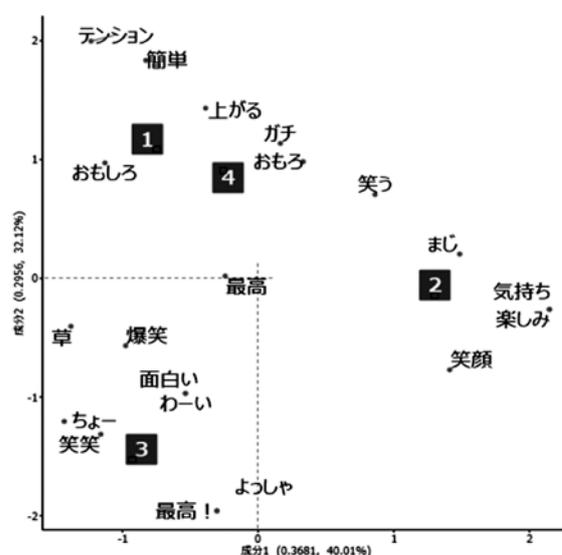


図4 感情語「楽」の対応分析

図1から図4における■に白字で表記された数字はクラスタである。

IV. 考察

本研究では、医療・福祉系大学生を対象として、情動知能と日常的に使用する喜怒哀楽に対応する言語の関係について検討した。本研究の調査の結果、以下のことが明らかとなった。情動知能については、J-ESCQから項目を精選して用いても先行研究と同様の因子構成を得られた^{13, 14)}。青年を対象とした情動知能の調査において、J-ESCQをより簡便に用いた尺度開発の可能性が示唆された。情動知能の下位因子の分散分析の結果、2011年から2013年の3年間では性別の主効果は見られなかった一方で、2022年では、〈情動の表現と命名〉において、男性が女性よりも有意に高かった。八ヶ岳らの大学生を対象とした調査でも、男性の方が女性よりも〈情動の表現と命名〉で高い結果を得ている¹⁵⁾。一方で、大学生を対象として単独や公的といった状況と感情表出の程度と性別の効果を検討した結果、喜びや悲しみについて、女性の方が男性よりも優位に表出することが明らかにされている¹⁶⁾。本研究で得られた結果は、この結果とは異なり男性の表出の方が優位であることを示している。このような、感情表出に関する男性の優位性については、大井らにより、ストレス対処行動に果たす性役割や問題解決場面における性役割認識は、男性が優位であることを指摘されている¹⁶⁾。本研究で得られた結果は、感情の表現と命名の機能は、男性が女性より高く評定されることを示したものである。

2022年の調査で得られた結果について回答者のクラスター分析を行った結果、4クラスターの解釈合理性が高いと判断した。クラスターの特徴としては、全体的に非常に高く天井効果を示しているクラスター（クラスター3、N=33; 18%）、全体的に評定値が4程度のクラスター（クラスター2、N=82; 44%）、表現と命名のみが低いクラスター（クラスター1、N=57; 31%）、全体的に低いクラスター（クラスター4、N=14; 8%）というものであった。4つのクラスターと性別の関係は有意ではなかった（表7）。そこで、4つのクラスターの特徴をより詳しく検討するため、回答者が日常的に使用する感情語とクラスターの対応分析を行った。自由記述の対応分析では、ここでは①から④の数字として表示されるカテゴリラベルとそれと距離的に近く表示される単語によって図示される。布置図におけるクラスターの配置では、喜怒哀の感情語では①、②、③と④の布置が離れていることが分かる。楽ではクラスター③が①、②、④と離れていることが分かる。また、喜怒哀においては、クラスター④に関連する感情語が他のクラスターと比べて少ないことが分かる。クラスター④は、クラスター①、②、③と比べて情動スキルの自己認知が全般的に低いという特徴がある。J-ESCQの評定値

が全般的に低い場合、他のクラスターに比べて、想起される情動語の総数やバリエーションが少ないという結果であった。

情動知能と言語機能の関係については、幼児を対象とした社会情動スキルと言語機能の関連の実験的研究において、感情の表出や調整機能と幼児にとっては高度な名前書字に有意な関連が見られることが明らかにされている²⁰⁾。青年期以降のパーソナリティを測定するための代表的な尺度Big Fiveを用いた先行研究では、J-ESCQとBig Fiveの関連については、大学生を対象とした調査の結果、情緒の表現と命名は情緒不安定性とネガティブに相関し、外向性、開放性、誠実性とはポジティブに相関するという結果が得られている²⁾。また、社会的相互作用の機能として対人的関心を取り上げ、対人的関心の個人差としての他者意識特性と情動知能の関連を検討した結果、他者の〈情動の理解と認識〉と内的他者理解（項目例「人の言動には絶えず注意を払っている」）とは高い相関（男性 $r=.56$ ；女性 $r=.53$ ）がある一方で、外的他者意識（「人の外見に気を取られやすい」）とは低い相関関係（男性 $r=.18$ ；女性 $r=.07$ ）を得ている⁵⁾。このように、情動知能と言語スキル、社会的相互作用に関わる特性には関連が見られる。本研究では、自身の感情状態を表現したり、他者の感情状態を推測したりするための手がかりとしての情動に関する語彙数やバリエーションが、J-ESCQの得点が全般的に低い場合に少なくなることが示された。

本研究においても、情動知能が低い場合は、自身の感情状態を表現したり他者の感情状態を推測したりするスキルが低いことが示された。そのため、情動の表現や理解を促進するための支援が求められる。本研究では、自由記述の対応分析の結果、楽に関する結果は、クラスター4だけが他のクラスターと異なる傾向を示さなかった。このことから、情動の表現や理解については、楽しいことやポジティブな感情状態との関連づけが手がかりになると考えられる。Nelisらがおこなった大学生を対象とした介入研究において、情動知能のトレーニングとしてレクチャーやロールプレイなどのプログラムと自分の感情経験の理解に関するワークが行われた結果、介入群におけるパフォーマンス、自己評定などが統制群よりも高くなったことが示されている¹⁷⁾。この介入においては、自身のポジティブな感情状態を自覚するといった活動が組み込まれていて、ポジティブな感情に焦点化した教育プログラムRULER (Recognizing Understanding Labeling Expressing Regulation) を紹介している¹⁸⁾。同様にRULERでは、Mood Meterという教材が用いられる。Mood Meterは、感情価と覚醒度の2軸を設定し、ある情動がどこのゾーンにあるかを考えさせたりすること

で、抽象的な情動を整理して理解することを促進することができるものである。このように、ポジティブな情動に焦点化することで情動の表現や理解を促進することができることが確認されている。本研究では、J-ESCQ得点が低いものも楽しい気持ちに関する情動語は、他のクラスタのものとは比べて、回答された情動語の数やバリエーションが少なくなかったため、今後、大学生の情動スキルトレーニングにおいても、ポジティブな情動に焦点化した介入によって、情動知能を高めることができる可能性があると考えられる。

本研究は、小玉らと同様の手続きによって実施され、分析方法は一部異なるものの、同様の知見を見出している。語彙数の増加と質の低下については、小玉らは、2011年から2013年の調査によって、学生は日常的に、同世代や友人間だけで通用する言葉や自分なりの表現等を使用していることが多いことを指摘している⁶⁾。本研究においても、「ぴえん」「ばおん」といった、調査回答者の世代では日常的に使うものの、他世代では使用経験がない語や「むり」というような、辞書に掲載されていても辞書的な意味では使われない語が見られた。さらに、分量の都合量記載できなかったものの、テキストマイニングの対象にはならないいわゆるアスキーアートや絵文字の使用も見られた。2011年から10年程度経過した時点でも、小玉らの指摘した傾向が現在も継続していることが示された。図1から図4において、「ぴえん」「ばおん」といった、調査回答者の世代では日常的に使う単語(図3)や、「草」といった2011年以降、辞書的な意味ではなく、SNSで特有の意味で用いられる言葉(図4)が示されている。

小玉らでは、2011年から2013年の間に情動スキルに有意差がなかった⁶⁾。そのため、この3年分のデータを平均し、2022年の結果と比較した。その結果、男性においては、〈情動の表現と命名〉と〈情動の理解と認識〉で2022年の方が先行研究よりも高く、女性においては、〈情動の理解と認識〉と〈情動の制御と調節〉で2022年の方が先行研究よりも高かった⁶⁾。2022年の方が感情に関係する言語の表現については、語彙数の増加に伴う質の低下が継続しているのに対し、情動知能の得点については2010年代よりも高い得点を示している。このような、自己評定式のアンケート回答結果とパフォーマンス課題の関係が非一貫的であることについては、次のように考えることができるかもしれない。現代の大学生にとって主たるコミュニケーションツールの一つはSNSである。松浦らは、看護系大学生を対象とした調査の結果、大学生のSNS利用率は100%、50.7%がSNSのほうが対面よりも交流しやすいと感じている一方で、92.6%がSNSでの交流に危険性を感じているという結果を得

ている¹⁹⁾。大井らは、看護系大学生を対象としたICT機器利用とネット依存度に関する調査結果において、75.8%が高依存度群、40.91%が中依存群に該当することを示した。中依存群以上の半数以上が一日当たり3時間以上SNSを利用すること、友人と大切な話をする際にも80%がメールやLINEを用いることを示した²⁰⁾。SNSを頻繁に利用する大学生はコミュニケーションの多くの時間をSNS利用に費やすこととなる。そのため、SNS特有の言語が産出される。越智は、コミュニケーションの開始におけるTwitter特有の言語があることを示した²¹⁾。本研究で、「ぴえん」「ばおん」といった他世代が使うことのない言語が表出されているのは、SNS特有の言語を用いているためであり、語彙の質の低下が情動機能の低下を示しているわけではないと考えられる。一方、岡本は、現代の大学生はSNSなどでの社会的比較や友達申請の拒絶、閲覧の強要が求められていることを示した²²⁾。また、速水は、傲慢で凶々しく罪悪感も感じない膨張した外見と自信が持てなく傷つきやすい委縮した内面が同居した青年像に対して、仮想的有能感と命名し、自尊感情と区別している。仮想的有能感によるコーピングは適応的ではない^{23, 24)}ものの、現代の大学生はSNS利用において友達申請を一方的に拒絶されたり、社会的比較の場面にさらされたりする現状を反映すると、SNSによる過剰な社会的相互作用が情動機能を高めた一方で、情動知能が十分に高くないものは社会的相互作用場面において情動的処理がうまく行えないため、情動語の数やバリエーションが少なくなってしまうことが考えられる。医療・福祉系の学生は、実際の支援場面では患者と対面的なコミュニケーションを行わなければならない。そのため、患者との対面的なコミュニケーションを支える共感や情動機能を大学の授業や演習、実習などで計画的にトレーニングすることが求められる。

V. おわりに

本研究の結果、2010年代から継続して表出される情動語のバリエーションが増加傾向にあること、大学生の世代に特有な言葉が使われていることが明らかとなった。大学生を取り巻く教育やICT環境はわずか10年前と比較しても大きく変化したといえる。2020年の新型コロナウイルス感染症増加を機に、教育におけるインターネット利用の割合は劇的に増加した。医療・福祉系の学生には、今後、患者との対面コミュニケーションを円滑に行うための情動性を高めるためのトレーニングを計画的に実施することが求められる。本研究でみられたような、ネット特有の言葉を日常的であると捉える傾向は今後も高まっていくと考えられる。今後も本研究を継続するこ

とが望まれよう。

利益相反 開示すべき利益相反はありません。

謝辞 本研究にご協力頂いた皆様に、謹んで感謝の意を表します。

文献

- 1) 日高優：看護学生における共感性の検討—看護大学2校の学後学生に対する共感性の調査から—。日本看護科学会誌。36(0)：198-203, 2016.
- 2) Salovey, P., & Mayer, J. D.: Emotional intelligence. *Imagination, Cognition and Personality*, 9: 185-211, 1990.
- 3) Law, K. S, Wong, C. S., & Song, L. J.: The construct and criterion validity of emotional intelligence and its potential utility for management studies. *Journal of Applied Psychology*, 89: 483-496, 2004.
- 4) 豊田弘司, 森田泰介, 金敷大之, 清水益治：日本版 ESCQ (Emotional Skills & Competence Questionnaire) の開発。奈良教育大学紀要人文社会科学。54(1)：43-47, 2005.
- 5) 豊田弘司, 森田泰介, 岡村季光, 稲森涼子：大学生における他者意識と情動知能の関係。奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要。17：29-34, 2008.
- 6) 小玉有子, 齋藤三千政, 戸来睦雄：学生の感情を表す語彙と情動スキルの変化。弘前医療・福祉大学紀要。7(1)：25-32, 2016.
- 7) 山本晃輔：情動知能の個人差と無意図的に想起される自伝的記憶との関係性。大阪産業大学 人間環境論集。17：59-68, 2018.
- 8) 沖林洋平：IATと情動知能、記憶の自伝的精緻化の関連。日本認知心理学会発表論文集：53, 2012.
- 9) 樋口広思, 越中康治, 久保順也, 他：コロナ禍における大学の遠隔授業～学生アンケートの数量的・質的分析をもとに～。宮城教育大学教職大学院紀要。2：53-72, 2021.
- 10) 光永文彦：中等教育におけるオンライン授業の設計・構築・実践と支援の一事例。科学教育研究。46(1)：41-44, 2022.
- 11) 小松佐穂子, 箱田裕司：情動性知能に関する研究の動向。九州大学心理学研究。12：25-32, 2011.
- 12) Mayer, J. D., & Salovey P.: What is emotional intelligence? In P. Salovey., & D. Sluyter. (Eds.). *Emotional development and emotional intelligence: Educational implications*. New York Basic Book: 3-34, 1997.
- 13) 豊田弘司, 酒井雅子：高校生用情動スキルとコンピテンス質問紙尺度の開発。奈良教育大学 教育実践総合センター紀要。17：11-14, 2008.
- 14) 豊田弘司, 桜井裕子：中学生用情動知能尺度の開発。奈良教育大学 教育実践総合センター紀要。16：13-18, 2007.
- 15) 八鍬真理子, 水野治久：大学生の情動コンピテンス心の病に関する否定的認識が大学生のカウンセラーに対する援助不安に及ぼす影響。カウンセリング研究。44(2)：148-157, 2011.
- 16) 大井修三, 今枝未紗：社会的不適応と性役割期待。岐阜女子大学紀要。47：31-43, 2017.
- 17) Nelis, D., Kotsou, I., Quoidbach, J., Hansenne, M., Weytens, F., Dupuis, P., & Mikolajczak, M. Increasing Emotional Competence Improves Psychological and Physical Well-Being, Social Relationships, and Employability, *Emotion*. 11(2): 354-366, 2011.
- 18) 野崎優樹：第8章 情動知能 非認知能力。小塩真司(編) 133-138。京都：北大路書房, 2021.
- 19) 松浦彰護, 坂東美知代, 佐藤美央, 中谷章子：看護大学生のSNS利用における対人コミュニケーションの特徴。神奈川工科大学研究報告。A, 人文社会科学編44：9-15, 2020.
- 20) 大井文稔, 小野保：SNSの利用傾向からみた看護短期大学生のネット依存とコミュニケーション・スキルの関係。岩手看護短期大学紀要。11：53-62, 2015.
- 21) 越智徹：FF外から失礼します。工学系大学生の考えるSNSマナー。情報教育シンポジウム論文集2018(37)：242-247, 2018.
- 22) 岡本卓也：SNSストレス尺度の作成とSNS利用動機の違いによるSNSストレス。信州大学人文学部論集。4：113-131, 2017.
- 23) 速水敏彦：他人を見下す若者たち。講談社現代新書。講談社：2006.
- 24) 速水敏彦：仮想的有能感研究の展望。教育心理学年報50：176-186, 2011.

Relationship between emotional intelligence and emotional words of health and welfare university students

Ariko Kodama¹⁾ and Yohei Okibayashi²⁾

- 1) Hirosaki University of Health and Welfare School of Health Sciences, 3-18-1
Sanpinai Hirosaki Aomori 036-8102 Japan
- 2) Yamaguchi University Faculty of Education, 1677-1, Yoshida, Yamaguchi-Shi,
Yamaguchi, 753-8513, Japan

Abstract

The purpose of this study was to investigate the relationship between practical usage of words and emotional intelligences those who health and welfare university students. In this study, a quantitative and qualitative analysis of the emotional intelligence and expressed emotional words of undergraduates in school year of 2022 was conducted. 186 undergraduates from health and welfare work universities were surveyed. The expressed emotional words were free-answer questions concerning the words they use in their daily life to express their feelings of joy, anger, sadness, and pleasure. The results of the survey showed that the factor structure of emotional intelligence was the same as in previous studies. Respondents' emotional intelligence patterns were cluster-analyzed, and four clusters were considered to have high interpretative validity. A correspondence analysis between the clusters of emotional intelligence and the expressed emotional words revealed that clusters with low scores on all factors of emotional intelligence had fewer expressed emotional words than other clusters, both number and variations of the expressed emotional words.

Keywords: Emotional Intelligence, Emotional Words, Health and Welfare University Students